



## 近代中国人から見た日本語

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2008-05-21 キーワード: 作成者: 李, 運博, 吉見, 孝夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00004992">https://doi.org/10.32150/00004992</a>

## 近代中国人から見た日本語

李 運博・吉見 孝夫

### The Japanese Language observed by Modern Chinese People

Li YUNBO・Yoshimi TAKAO

Dept. of Japanese Language, Sapporo

#### 目 次

はじめに

第一章 19世紀までの文献に見られる日本語に関する記述

第二章 黄遵憲の見た日本語

第三章 王照の見た日本語及び「官話字母」

第四章 戴季陶の見た日本語

第五章 梁啓超及び清末民国初の中国人の見た日本語

おわりに

#### は じ め に

中国と日本は一衣帯水の隣国であるだけでなく、友好往来の歴史も、二千年前に遡ることができる。清朝初期までとくに隋、唐代には、日本からの使節や留学生が中国に渡って、中国の文化を吸収して、日本に持ち帰り、日本の文化の発展に寄与したことも再三にとどまらなかった。

このような文化交流は清朝までは一方的だったが、近代に入った後、日本はどんどん進歩発展する一方、中国は政治、経済、文化、社会などの分野ではずいぶん立遅れてしまった。特に甲午（日清）戦争の後、思いがけない敗戦と屈辱的な講和に中国は大きなショックを受けた。「小国」の日本に対し「何ぞ興るの俄かなるや」<sup>≒1</sup> という問いかけが発せられた。さらに、その雰囲気の中に、1896年に初めて公式に13人の留学生を派遣したことをきっかけにして、史上最初の留学ブームを迎えた。その後も2、3回のブームを経て、100年余りの歴史を送った。

この100年余りの間に日本に留学した学生の数は数十万人にも昇る。この他に、遊歴、教育視察、駐外公務、亡命などの目的で来日した人の数も数え切れないほど多かった。彼らは日本語ばかりではなく、日本の社会、政治、経済、風土人情などの様々の分野について、真剣に考察したり研究したりして、多くの成果を挙げ、中国の文化、教育、社会、政治などの諸方面に大きな影響をもたらした。

とりわけ、日本で「仮名のくわい」ができたのが明治16年、「羅馬字会」ができたのが翌17年で、言文一致の運動が興ったのが明治21年である。従って、大勢の中国人は日本にやってきた時はちょうど日本の言文一致運動の最中で、喜ばしい成果を収めていたところであるので、日本語は彼らに大きな啓発と影響を与え

たに違いない。しかし、彼らは一体日本語をどう見ていたか、中国人はどのように日本語を受け取っていたのか、日本語は近代中国社会、中国文化、特に近代中国文字改革運動にどんな影響を与えたか、これに関する研究や論説はほとんどない。

私はここに、何人かの例を挙げて、彼らの見た日本語を考察して、日本語が近代中国、特に近代中国文字改革運動に与えた影響を解明して、中日友好交流の一環としての中日文化交流の実態を探りたいと思う。

## 第一章 19世紀までの文献に見られる日本語に関する記述

本論文は近代の中国人の日本語観を対象とするが、そこに至るまでを概観しておこう。

中国の古い史書で、日本の地理や風俗のことを記録したものは少なくない。古い順にいくつかあげると『三国志』（三世紀）、『後漢書』（五世紀）、『宋書』（六世紀）、『隋書』（七世紀）などで、この辺りまでは、「倭・倭国・倭人」などの語が用いられ、十世紀の編集になる『旧唐書』以後、初めて「日本」という言い方が登場する。にもかかわらず、古代中国人の日本語に関する著作、論説、考察などは案外に少ない。最初日本語を記録したのは、晋代に編まれた歴代王朝の歴史の記録『二十五史』の一つに数えられる『三国志』の中の『魏志』である。『魏志』の中に「東夷伝」がある。これは、その一部をさいて倭人の記録にあてた。但し、これは「其の大官を卑狗といい、副を卑奴母離という」といった程度で、ごくわずかの発音に止まり、極めて簡単だった。

また、隋、唐、宋の時代に入ると、日本から使節や留学生が渡って、中国の文化を吸収して、日本に持ち帰り、日本の文化の発展に寄与したことも再三にとどまらなかった。しかし、中国の側からすれば、日本は数多い蛮夷の中の一つに数えられるのみで、ほとんど好奇心の対象以上に出ることはあまりなかった。従って、その言語について極めて零細な記述しかみられないのも、不思議ではない。例えば、南宋の羅大経の『鶴林玉露』という本に十数語の日本語の単語が並べられている程度で、陶宗儀の『書史会要』に「いろは」四十七文字の音訳がかかげられているのをむしろ異例とすべきであった。

ところが、明の時代に入ると、事情はやや違ってくる。『華夷訳語』『日本寄語』『籌海図編』『日本一鑑』『武備志』『八紘訳史』『篇海類篇』『日本風土記』のように、多くの日本に関する記録があらわされた。そして、これらの書物には日本の国情がやや詳細に記述され、また多かれ少なかれ、日本語の語彙が付記されていて、明代人の日本語の知見が一応表されている。但し、明代人は日本語に対する観察が原則的に基本的な語彙の記述の段階にとどまっていたようである。つまり、日本語の記述は日本事情の一環として描写されているのであって、日本語を徹底的に学習しようとするまでには至っていない。

本当にあらゆる分野で詳細に、系統的に日本及び日本語を研究するようになったのは、清朝からである。しかし、清朝の初期から中葉までは日本を研究する書物はあまり見あたらない。あっても大体明代末期ぐらいのレベルのものだ。研究と呼べるのは清朝末期（日清戦争後）からである。

また、その時からの研究は以前に比べて、まったく逆の方向に向かっている。要するに、日本明治維新以前には、文化の分野では、中国はずっと日本の輸出元であった。しかし、甲午戦争の後に、その地位はまったく逆転し、文化上の逆流的な現象を形成した。そして、「変法自強」という合言葉が、どこからともなく叫ばれた。

その中で代表的なのは、清末の開明派名臣の張之洞の『勸学篇』である。彼は「一年洋行することは、洋書を五年読むことに勝り、外国の学堂に一年学べば、中国の学堂に三年学ぶことに勝る」<sup>42</sup>と極言した上で、「各省の学堂創設の任にあたる吏員と紳士はまず外国へ教育視察に行くべきにして、（中略）日本へは断じていかざるべからず」とまで述べて、外国特に日本に学ぶことを強く訴えた。

その環境を背景にして、1896年に、駐日公使裕庚が、当時外務大臣で文部大臣を兼任していた西園寺公望を通して東京高等師範学校長の嘉納治五郎に中国人青年13人の教育を依頼したのが始まりで、大勢の留学生が勢いよく日本にやってきた。

この留学ブームで、1903年から1906年のわずか3、4年の間に日本に留学した学生数は一万以上に昇った。この他に、遊歴、教育視察、駐外公務、亡命等の目的で来日した人も数え切れないほど多かった。ここに代表的に黄遵憲、王照、戴季陶、梁啓超の例を挙げ、彼らの見た日本語観を論じてみよう。

## 第二章 黄遵憲の見た日本語

真っ正面から日本を相手にとっての日本及び日本語研究は、なんといっても、清朝の初代駐日公使の参贊官（書記官）の黄遵憲<sup>#3</sup>の『日本雑事詩』<sup>#4</sup>、『日本国志』<sup>#5</sup>がその圧巻だといえよう。特に、『日本国志』は日本研究の画期的な傑作と呼ばれている。

黄遵憲は日本の古代文字について、次のように書いた。

国学空伝卜部名、 国学空しく伝う 卜部の名、  
 三輪寺額未分明。 三輪寺の額 未だ分明ならず。  
 天然 | || 横縦画、 天然 | || 横縦の画、  
 万国翻同墮地声。 万国翻って同じ 地におつるの声<sup>#6</sup>。

そして、彼はこの詩に注をつけ、次のように説明している。

神代にはもともと文字があって、推古朝になっても、まだ卜部家に隠れていたという。近世になって平田篤胤は神代文字の説を主張した。その根拠とする鎌倉八幡寺と和州三輪寺の寺額はみな字がぼんやりしていて、よく分からない。つまり、それはみんなうそだ<sup>#7</sup>。

それに、黄遵憲は次のように述べて、日本はもとは文字はないと主張した。

私の考察によると、中国の書物が日本に伝わる前は、日本には文字がなかった。但し、| || 横縦画を用いて、ことを記述することがある<sup>#8</sup>。

また、日本語の起源について、次のように述べた。

論語初来文尚古、 論語初めて来るや 文なお古なり  
 華嚴私記字無訛。 華嚴私記 字 訛なし  
 老僧饒舌偏多事、 老僧 饒舌 偏えに多事  
 仮字流传伊呂波。 仮字流传して 伊呂波あり<sup>#9</sup>

それに、彼は自ら注をつけ、次のような主旨を加えた。

唐の開元時代には、まだ仮名はない。唐の徳宗の時代になると、僧空海は日本人の使用上の便宜を図り、漢字の伊、呂、波などの四十七字を借用し、それらに土音をつけ、日本語の音をあらわすイロハを創作した。それにしたがって、日本語を形成した<sup>#10</sup>。

彼は以上のように主張すると同時に、上古にも既に「伊呂波」があり、曾て聖徳太子が法隆寺を造った時、大工に使われたことがあるという説をも、「伊呂波」は実は『涅槃經』よりなったものだという説をも、臆説だとして否定した。

そして、彼は漢文が日本語の形成に与えた影響について、次のように述べた。

日本には昔文字がなかった。王仁が論語、千字文を齎してから、日本では初めて文字を知った。又、漢文の実字【内容的要素、名詞など】には通じているが、虚字【文法的要素、助詞等】はよくわからない。そこで、漢文を教えたときには、日本語を交えて使っている。日本語はすべて実字が前に虚字が後

になっている。そんな訳で、後に漢文を引っ繰り返して読むようになったのである<sup>#11</sup>。  
また、彼は日本語の発音について次のように述べた。

日本には中国の言語の発音が呉音・漢音・支那音の三種類ある。知識階級で漢学に通じているものは、時々漢音・呉音をあやつるが、ますます変化していて、じつは聞き分けることができない。日本人は五を「ゴ」といい、十を「ジュウ」という。これは漢音から変じたものである。一を「ひとつ」といい、二を「ふたつ」という。これはこの国の音である。市井の平民は、方言を使うものが十人に九人、漢音を使うものは、十人に一人である。日本全国の音は、ただ北海道が違うだけで、その外は同じである。しかし知識階級の文章は、言葉が長く、助詞が多くて、平民とは大変違っている。もし市井の商人のことで士大夫に話し掛けるなら、耳をふさいで逃げるにちがいない。そんなわけで、日本語に通じようとするのは容易ではない。我が国と字は同じでも発音が違い、語は同じでも読みが違い、字は同じでも意味が違う。そんなわけで、日本文を訳そうとしても、なかなか難しい<sup>#12</sup>。

日本語の発音の難しさ、特に同じ漢字を使う中国人にとって日本語の習得の難しさを述べた。にもかかわらず、彼はイロハ四十七文字について次のように深い関心をよせた。

莫嫌蛮語笑陬隅	蛮語を嫌 <small>かたすみ</small> い陬隅にあるを笑うことなかれ
国字能通用有余	国字 能く通じて 用余りあり
Y髻女兒初弄筆	Y髻 <small>あげまき</small> の女兒 初 <small>もてあそ</small> めて筆を弄び
塗鴉便寄阿娘書	塗鴉 <small>ぬりたくり</small> して便 <small>は</small> ち阿娘 <small>は</small> に書を寄す <sup>#13</sup>

それに、彼はまた次のように記載した。

不難三歳識之無	三歳 之 <small>し</small> と無 <small>む</small> を識 <small>かた</small> ること難からず
学語牙牙便学書	語を学 <small>あ</small> びて 牙牙 <small>あーうー</small> 便ち書を学 <small>あ</small> ぶ
春蚓秋蛇紛滿紙	春 蚓 <small>へたくそのもじ</small> 秋蛇 紛 <small>あ</small> として紙 <small>あ</small> に満 <small>あ</small> つ
問娘眠食近何如	娘 <small>は</small> に問 <small>あ</small> う 眠食 近頃 <small>い</small> 何如 <small>か</small> ぞと <sup>#14</sup>

さらに、彼は四十七文字について、次のように解説した。

伊呂波四十七字，已綜衆音，	伊呂波四十七字，已 <small>す</small> に衆音 <small>しゅうおん</small> を綜 <small>す</small> ぶ
点画又簡，易於習識。	点画 <small>てんかく</small> も又 <small>ま</small> た簡 <small>かん</small> ，習 <small>しる</small> い識 <small>やす</small> すに易 <small>やす</small> し。

注 伊作イ，呂作ロ，波作ハ  
仁作ニ，保作ホ，返作ヘ

注 伊はイ，呂はロ，波はハ  
仁はニ，保はホ，返はヘ

以假其偏旁，名片仮字。  
其仮字則伊呂波之草書也。  
故彼国小兒，学語以後，  
能通仮字，便能看小説，  
作家書矣。假字或聯属  
漢文用之，単用仮字，  
女人無不通者。

其の偏旁へんぼうに仮かるを以かて、片仮字かたかなと名づく。  
其の仮字かなは則ち、伊呂波そりしよなりの草書也。  
故ゆえに、彼かの国しやうじの小兒は、語を学あびて以後、  
能よく仮字に通すずれば、便すち能く小説を看、  
家書を作る。仮字かな、或いは漢文れんぞくに聯属して  
之これを用もちいる。単に仮字を用もちいれば、  
女人の通とぜざる者無し<sup>#15</sup>。

当時の中国の社会では小兒，女はいうまでもなく，大人の男でさえも，漢字も読めない，家書も書けない，自分の名前も書けない，いわゆる文盲・半文盲が溢れるほど存在しているという現実と対比しながら，日本人のカナの発明を高く評価した。

この他に彼は『日本国志』の第33巻の「學術篇」2では日本の仮名文字について，次のように述べた。

日本方言を考察すれば、日本の字は全て四十七字より他はない。この四十七字は一字に一音という。また音、字があるといっても意味はない。しかし、いくつかの字の連続で、語を成せば、一切の方言は統撰して、義は自ずと其の中に含んでいる。さて、言語と文字は一致すると言語表現上の障害が必ずなくなる。この方法で文字を改革すれば、文字の使用は便利になり、その影響は広がるだろう<sup>#16</sup>。

さらに、彼は日本語の「数歳の幼児もことばを覚えて、仮名が読めるようになったら、小説を読んだり手紙を書いたりすることができて、大変便利だ」と、強い共感を表した。

また、彼は日本国内の漢字・仮名の存廃についての論争に触れながら日本の仮名文字の役割を論述した。

もし、日本は仮名がないならば、字が分かる人は大変珍しいだろう。一国の中に、文字の役割は尽きることがない。漢文が分かる人は一人二人ぐらい【極めて少なく】がいても、将来、博士の位に上がったり、「驢」や「券」等の難しい漢字を書けたり、鯁生【自己に対する謙称】や狗曲【こまごまとした礼儀作法（所謂曲礼）を軽んじ、賤しめて言う】を知ったりする人は、一体何人いるだろう。

私が聞いたことによると、昔ローマはラテン語だけを使った。各国の言葉は違っているので、使い方の難しさに大変悩んでいた。ところが、フランスはフランス語にかえ、英国は英語にかえたとともに、フランスとイギリスの文学が盛んになり始めたようだ。キリスト教が盛んになったのも『旧約』も『新約』も各国の言葉で翻訳したからである。そもそも、言語と文字は一致しないなら、文に通じる人が少なくなる。一致するなら、文に通じる人が多くなる。言語、文字の進む方向もその通りである。日本の仮名は東方【アジア】の学問と道德の教育に役立つものは多いのにどうして怠ることができるか<sup>#17</sup>。

彼は言語文字の進化傾向の視野から、日本語の仮名の役割を絶賛するとともに、日本の仮名は必ず中国語だけではなく、アジアの国々の言語、文字に良い影響を与えてくれるのを信じていたようだ。さらに、彼は習熟に努力を要する表意文字の漢字が中国の近代化にとっては一つの難題だと考えて、中国の文字や文体の問題を取り上げて、次のように述べた。

泰西の論者はよく五大州のうちには中国文字は最も古く、最も学びにくいという。また、中国の言語と文字は一致してなくて、難しいという。しかし、中国の虫・魚・雲・鳥のごときは、しばしばその字体を変え、後には隸書となり草書となる。私はよく分からないが、他日はまたほかの字体に変え、ますます簡単になり、便利になっているであろう。（中略）

周秦以降、文体はしばしば変り、近世にいたって、章疏・移檄・告諭・批判に及んでは、明白にして分かりやすく、達意をむねとして、その文体は古人にたえて例を見ない。小説家のごときは、俗語でじかに書き、言葉と文章をほとんど一致せしめている者すらある。さても、後日文体さらに変更して、今日に適用し、世俗に通行するものが現れないというのは、私も保証できないけれど、天下の人々をしてみな能く文字の用に通じさせるため、ここに一簡易の法を求めざるをない<sup>#18</sup>。

彼は、ここに中国の文字を平易なものに改め、言文一致の書き方に改めるよう、主張した。その時に、日本でも言文一致の運動はまだ起ったばかりである。このような歴史条件で、文体改良・漢字改革への道を予測する、この名言をはきえた点で、彼こそまさに文字改革の先覚者というべきだろう。

黄遵憲の日本語に対する研究は、仮名文字の機能や効用を説明する必要から、日本語の構造や性質を日本文の漢字仮名交じりを中心に大変詳細にうまく説明しており、極めて説得力に富んでいるので、彼の日本語研究が高い評価を受け、大きい影響を及ぼした。

ところで、日本語からの啓発を受けて、このような文字改革思想を持った人は黄遵憲だけではない。中華民国時代の民国大学の教務長【日本の副学長に相当】の地位にあった黄尊三も次のように述べた。

教育を普及させるには、言文一致でなければ、断じて成功しない。中国の文字は難しすぎるから、一般の人は、たやすく読むことができない<sup>#19</sup>。

当時の中国人、特に日本で日本語の啓発を受けた人々の中には「中国の国家が弱いのは、一般の国民に知識がないからだ。国民に知識がないのは、教育が普及していないからだ。教育を普及させるには、中国の文字を改革しなければいけないのだ」<sup>20</sup> という考え方を持っている人は少なくなかった。文盲一掃は簡化文字から始まる、この考えはピンイン運動【注音字母の使用】の基礎でもあり、中華民国時代からの言文一致の白話運動の萌芽ともなった。

### 第三章 王照の見た日本語及び「官話字母」

黄遵憲と同時代の王照<sup>21</sup> は1898年に光緒帝に西太后を奉じて外遊されるよう、それには先ず日本に行幸されたら良いこと、また教育部を創設せられたきことを上奏して、認められ、四品京堂候補に抜擢された。そして、光緒帝は日本の駐割公使の黄遵憲を召還して新政に参画せしめ、その後任として王照を日本へ派遣する考えであったらしい。しかし、戊戌政変はまもなく失敗したので、王照に指名国事犯として逮捕命令が下り、遂に日本に亡命したわけである。

亡命中、彼は1900年に下記の「官話字母」というカタカナそっくりの五十の表音文字を創り、それによって、教科書だけでなく新聞までも発行した。これは中国語の言語史で「仮名式字母」とも呼ばれる。

<p>乙 取京音字一畫 取爺字一畫</p> <p>一 取京語安字一畫</p> <p>了 取阿字一畫</p> <p>一 取哀字一畫</p> <p>一 取豪字一畫</p> <p>丁 取翁字一畫</p> <p>儿 京語兒</p>		<p>十二喉音 非口授不能讀</p>	<p>才 撲 ト ト 才 木 夫 夫 五 五 文 皮 必 十 米 廠 麤</p> <p>二 租 夕 蘇 ナ 都 土 土 刀 初 寸 朱 巾 書 入 入 又 奴</p> <p>七 盧 干 辭 マ 姿 么 絲 巾 德 牛 特 乙 低 乙 題 小 運</p> <p>之 寸 詩 日 日 イ 訥 レ 勒 女 女 口 呂 尸 居 出 趨</p> <p>リ 劔 子 子 七 戈 七 科 禾 禾</p>	<p>五十音母 注字皆從京音初授讀時皆專作上平勿泥於其注字之聲總以口授為準</p>
<p>上 去 平</p> <p>四 點 分 聲</p>				

註22

彼は音声を12個の喉音（韻母）と50個の音母（声母）に分ける。それに、彼は従来の字母が書きやすさを求めてあまりにも記号化しているのので、読みやすく記憶しやすい字母を創ろうと考えた。そこで、片仮名に習って〈阿〉の字から取った〈了〉でaを表し〈撲〉(pu)から取った〈才〉でpを表すなど、漢字の字形

の一部を利用した 62 個の字母を考案した。

ただ、王照が日本在留中にどれだけその仕事をしたか、それは確かな資料がないが、今手元にある資料としては一番早いのが『重刊官話合声字母序例及関係論説』（1928 年）と題する小冊子で（『官話合声字母』所収、文字改革出版社出版）、表紙の裏に次のように書いてある。

庚子【1900 年】の初稿を辛丑【1903 年】に日本東京で印刷し、後にその文字を改訂した。今これを再版するに当たり、吳京卿吳汝綸並びに中日両国人の官話字母に関係した論説を付き加え、海内の文人が感動提唱せむことを希望するものである。本塾で印行した字母ピンインの書物は専ら字母を学ぶ人に与えるので、その方には漢文を入れてない、これとは別系統である<sup>#23</sup>。

庚子の初稿とは、この本に載せられた「官話合声字母」の原序に「大清光緒二十六年冬季蘆中窮士自叙於天津城東寓所」と、あるのに当たることと思われ、つまり庚子即ち光緒 26 年、日本から帰って天津に蟄居していた間に拵えたものらしい。また、王照は何故「官話字母」を作ったのか。これは、彼が日本に亡命して、その教育普及の実情を見、ことに普及の道具として仮名の働きを認めたからに違いない。これは、次のことから推察できるだろう。

光緒二十七年には、王照が北京に赴いて李鴻章に会おうと試みたが、李鴻章は病に託して会わず、于式枚に命じて王照の説を聞かした。于式枚は「足下は海外から帰朝されたのであるから、定めし救国の策略を抱かれていることであろう、一つ承りたいもので」と言ったところ、王照は「天下の事は一策一略で形づくものではござらぬ、今我が国には秀才拳人進士合わせて二十万あるが、日本で普通教育を受けたもの五千万人に比べると二百五十分の一に過ぎない。一を以って二百五十に当るようなことでは策略の施しようがない。政府としてはぜひ下層教育に注意していただきたいのであるが、下層教育の隘路を打開しようとするには言語と文章との間を通わすような文字を作り、言文の一致を計らねばなりません」と。これを聞いた于式枚はひどく不機嫌で「これは足下にも似あわぬ仰せ。きっと足下には雄大なる策略をお持ちでありながら、我々小僧には聞かせぬぞというお考えかな」というので、王照も腹を立てて、「こんなわからぬ奴は」とばかり席を蹴って帰った<sup>#24</sup>。

また、王照はこの小冊子に『日本国誌』から前述した（この論文の第二章）黄遵憲の中国語の文字や文体についての論説を引用して、日本の仮名文字を手本にして、中国の文字を平易なものに改め、言文一致の書き方に改めよう、という主張を改めて強調した。

それに、王照はこの小冊子に日本の言語事情を分析しながら日本に倣って中国語の文字を改革しようと主張した。要約すれば次のようである。

私は今年の春に薩摩に行ったとき、学生があちこちに普通語研究会を設置するのを見た。普通語とは即ち東京語だ。それ故、現在、東京語に通じない薩摩人はほとんどいなくなった。

本来、自国の人が自国のことばを習うのはあまり難しくないであろう。特に、今は教育の発展にしたがって、口の不自由な人でさえ、ことばで自分の意志を表すのを教えられたのに、まして自由に話せる人においてはなおさらであろう。だから、今悩んでいるのはただ試行しないことだけだ。もし、日本に倣って、試行するなら、長い時間を経ないうちに、中国人もみんな言葉に通じるようになるだろう。

東京府第一中学校を見学したとき、勝浦頼雄学長にご馳走になり、教育について話し合った。勝浦氏は中国語は文字が多くて覚えにくい、と指摘した。私は最近中国では筆画を減らす文字を作る人もいる、と告げたら、彼はとても驚いた。彼はもし中国が確かにこの普通教育を実施すれば、進化は必ず速くなる、と述べた<sup>#25</sup>。

他に、王照はこの小冊子に「上張管学書（張管学【管学：官職名】に奉る書）」を載せて、言文一致の日本語を称賛した。要約すれば、次のようである。

中国には書籍と文章が広くて、深いので、子供はなかなか理解できない。言文一致の外国語と全く違っている。もし、小学校で全ての人を教えるのに求めたいなら、簡単な道を探すべきである。例えば、日本には仮名があるので、婦人も子供も何週間だけ習えば、自由に読んだり書いたり互いに手紙で文通したりすることができるようになる<sup>26</sup>。

さらに、王照は「直隸学務処覆文（直隸学務処への報告書）」に、次のように、日本の教育普及の現状を分析しながら、日本の仮名の役割を説明した。

私の調査によると、字母の役割は大体二つある。一つは教育普及の基礎になることである。もう一つはことばを統一するのを補うことである。

近年、日本では文化がだんだん盛んになってきた。百人の中に文字に通じる人が九十人余りいる。行商人も小使も皆本を読んだり、新聞を見たりすることができる。これはもちろん教育を重視するからであるが、平仮名と片仮名の役割を無視してはいけない。

通行している新聞や文章や襟記などは全て書かれた漢字の傍らに仮名が注してある。言語に深く通じる人は正文を読むが、浅く通じる人は傍注を読む。それぞれその便に従って、その使用に適する。小学校の教科書では、初めは全て仮名だけを使い、それから、だんだん漢字の量を増やす。

学問に優れる人は仮名を漢字を読むための手助とはしないが、愚かで鈍い人は仮名だけを身につければ本を読んだり新聞を読んだり手紙を書いたりするのに十分であり、本当に喜ばしいことである<sup>27</sup>。

王照の「官話字母」を発表してから、社会で多くの好評を獲得した。その中で一番強く賛成したのは当時著名な音韻学者の勞乃宣<sup>28</sup>である。勞乃宣は光緒帝に「請於簡易識字学塾内附設簡字一科並變通地方自治選民資格摺（簡易識字学塾の中に簡字という科目の附設を申請すること、並びに地方自治の選挙民の資格を変更することに関する意見書）」を奉って、次のように「官話字母」を称賛しながら仮名について論じた。

ヨーロッパの文字は二十六の文字を綴り合わせただけのものなので、十人のうち九人までは文字が読める。日本の文化は我が国から出たもので、わが漢字を用いているが、漢字のほかに五十音の仮名があって発音を示し漢字を助けているため、士君子の高深な学問は漢字を用いるが、愚賤のものはただ仮名だけ覚えても用が足せる。

ところが、我が国では昔から漢字だけでこれを助けるものがない。そのため上等の人は文字を読むが国民教育は普及しがたい。近年我が国でも教育に志す人の間に、覚えやすい文字を創るものがたくさん現れたが、中でも王照の拼音【ピンイン】官話書報社で創った官話字母が一番よくできている。五十母十二韻四声を組合せると二千余りの音ができ、京師の語音はすべて包括される。

もし、この数十字を覚えて、その綴り方を知れば、漢文の読めない者も白話で意を通ずることができ、新聞を読んだり、手紙を書いたりするのも、十分これでやれる。たとえ、老人や子供でも頭の良い者なら、数日で分かるし、いくら魯鈍な者でも二、三ヶ月たてば分からないものはなくなる<sup>29</sup>。

上述のように、王照は日本の仮名の役割を高く評価したうえで、自ら日本の仮名に倣って「官話字母」の文字改革案を創り出した。公表してまもなく社会で大きな影響を起して、最後に教育部門に正式に採用された。そして、勞乃宣の協力もあって、「官話字母」は10年間の間に中国の13の省【日本の都道府県に相当する行政区画】に普及し、6万余部の『拼音官話報』【新聞】や各種の字母書【字母読物】を発行して、実際に啓蒙上の効果を取めて、後の文字改革運動に大きな影響を与えた。

因みに、指摘しなければいけないが、王照は極力「官話字母」を推奨する一方、「官話字母」を創った目的、特に漢文の書籍との関係について、この小冊子に次のように述べた。

この字母は専ら貧民や婦人など、読書の力もなく暇もないもののために考えた便法であるが、読書人もこれを覚えて人を教える道具にしたり、下層の人たちと通信したりすれば、これもなかなか便利であ

る。ところが、もし読書の力とその暇のある人ならば、むしろ十年を費やして漢文の書物を読む方がよい。こういう近道があるからといって漢文を軽視してはならない<sup>#30</sup>。

つまり、彼は貧民や婦人など読書の力も暇もないものを下等人とし、読書の力も暇もあるものを上等人とし、下等人には字母を与え、上等人は漢籍を読んだほうがよい、即ち「官話字母」は下等人の文字であり、漢字は上等人の文字である、と考えた。これは清朝においてはむしろ自然な考え方であり、もっぱら上等人としての階級意識で上等人の立場で語った。

#### 第四章 戴季陶の見た日本語

黄遵憲は日本語の起源、特徴、中国語との関連、日本社会への影響などの方面から詳しく研究した。王照は日本の教育普及の実情を分析しながら、日本語の仮名の実績を高く評価した。二人とも日本語特に仮名の役割を研究したうえで、中国語を改革すべきだと唱えた。これに対して、孫文の秘書と日本語通訳を務めた政治家戴季陶<sup>#31</sup>は、主に日本語が日本民族の成立、社会生活の形成風俗習慣の養成などに与えた影響の面から日本語を考査、研究した。

戴季陶は『日本国志』とともに日本研究の巨著と呼ばれた『日本論』に次のように述べた。

以前、私は日本で勉強していたころ、同学の友人が何人もいたが、彼らは皆日本語や日本文の研究を嫌った。なぜ嫌うのか、理由を尋ねると、答えは二つあった。一つは、英語なら帰国してから、役に立つが、日本語や日本文は役に立たない、というのである。もう一つは、日本語そのものには研究価値がない、なぜなら、中国やインドやヨーロッパから輸入したもの以外に何もないからだというのである。この二つの理由は、前者は「実利主義」、後者は「自大主義」の弊に陥っている、と思う<sup>#32</sup>。

彼は当時の社会に存在している日本語や日本文を軽視する現象を取り上げて、所謂「実利主義」と「自大主義」を批判しながら、中国人は真剣に日本語研究に関心を向けるべきだと主張していた。そして、その理由について、次のように述べた。

学問からいっても、思想からいっても、また種族からいっても、日本という民族は、極東において、中国を除けば、最大の民族なのだ。(中略)

しかも、ここ三百年余りの期間において、世界文化史に占める地位は極めて重要なのである。だから、単に学問の領域だけに限っても、いろんな角度で専門研究をやる価値と必要があるわけである。ほんやり放置しておいてはならない<sup>#33</sup>。

彼は日本語を日本民族を構成する要素の一つとして、特に日本語を日本を研究する手段としていて、日本語を研究することを呼びかける一方、次のように述べて、日本語だけでなく、あらゆる分野から、真剣に日本を研究しなければならないと強調した。

日本人の性格はどうか。思想はどうか。風俗習慣はどうか。国家及び社会の基礎がどこにあるのか。生活の根拠はどこにあるのか。これら全ての点に涉って真剣に研究しなければならない<sup>#34</sup>。また、戴季陶は日本語が日本人及び日本社会に与えた影響について、次のように述べた。

(日本語の中には)女性がぞんざいなことばを使うことはほとんどない一方、男性はこれと異なり、中流以上の男性は、社交の際、数種のことばを使い分ける。この交際語は一貫して男性としての存在を示すものである。相手に対して、慇懃に、最高度の敬語を用いる場合でも、随所に人格の威厳を保つことを忘れない。幼いときから男性は、男性としての独立性と自尊性とははっきりと表す用語を使う。学校でも家庭でも、これを奨励しているそうである<sup>#35</sup>。

日本語の使い方には男女の差が存在していることを指摘した。続いて、これによって生じた日本社会の男

女の階級差の現象及びそれが社会に与えた影響について中国の社会と対照しながら、次のように分析した。

中国の男尊女卑は、表と裏がある畸形的制度であり、特に上流階級でこの傾向が著しい。即ち、男性が極端に女性を圧迫する事実がある反面、女性が極端に男性を圧迫する事実が存在する。男性は、名誉に係わるので、自らを偽って、忍耐し、ごまかしているのが普通である。

【日本の社会では】女性は男性に絶対的に服従するが、男性は女性に絶対的に保護を加える。一もとより例外はあるが、極めて稀有な威厳を保った男性の保護愛と、同情を備えた女性側の思いやりとが巧みな組織の下で調和している。日本の社会では女性が男性に「河東の獅子吼」蘇東坡が女性の嫉妬の罵り言を評した語を浴びせる光景はめったに見られないし、男性の女性虐待はもっと少ない。……従って、日本人の家庭は中国人の家庭よりもずっと円満である<sup>36</sup>。

上述のように、戴季陶はこの理想的な社会生活を形成した言語習慣について、心より賛美の意を表した。

## 第五章 梁啓超及び清末民国初の中国人の見た日本語

前述したように、黄遵憲は、和文中の仮名の重要な役割と理解の難しさをつぶさに述べたが、これと対照的に黄と同時代の、近代中国におけるブルジョアジーの改良主義の思想家であり、実践家である梁啓超<sup>37</sup>は、中国語と日本語が「同文」なので和文の読解は極めて容易であると考えた。

梁啓超は「論学日本文之益（日本文を学ぶ益を論ずる）」（1899年）という文章を『清議報』第1冊に載せ、日本語の理解の易しさについて、要約すれば次のように述べた。

日本文を学ぶ者は数日にして小成し、数ヶ月で大成して日本の学はわがものとなる。日本語を学ぶ方法もあり、日本文を作る方法もあり、日本文を読む方法もあり、この三者は区別しなければならない。日本語を学ぶ者は一年たてばできるはずであり、日本文を作る者は半年たてばできるはずであり、日本文を学ぶ者は数日たてば小成し、数ヶ月たてば大成する。私のいう日本文を学ぶとはもって日本書を読むことである<sup>38</sup>。

「数日で小成し、数ヶ月で大成する」とは、彼がどのくらいの責任感を持って言ったか分からなく、誠に恐れ入った議論であるが、ここから、彼の日本語の読解の易しさに対する思いが伺えるだろう。

続けて、梁啓超は次のように、その論拠を説いた。

日本文は漢字が10のうち7、8をしめ、もっぱら仮名を用いるのはただ脈絡詞【接続詞】と語助詞【助動詞、感動詞】などのみで、その文法はつねに実字を句首に置き、虚字は句末にあり、その例に通じて転倒してこれを読み、脈絡詞・語助詞のうち常用されるものは、これを基礎文法の記号として標記して、繰り返し覚えれば、書を読むに妨げとならない<sup>39</sup>。

但し、彼は「これは決してうそではない。私の友達の中にこのような方法を利用して成功を取めた人が大勢いる」と指摘した一方、「これには条件がある」と明言した。彼は次のようにいった。

これは漢文に通ずる人のためにいうのみである。もし、漢文に通じないまま、日本文を学べば、必ず転倒錯雑して乱れるようになり、日本文も漢文も成し遂げなくなる<sup>40</sup>。

他に、梁啓超は同じ『清議報』に「論訳書（書を翻訳するのを論ずる）」という文章を投稿し、日本文の学習しやすい理由を五つ挙げている。要約すれば、次である。

- ① 発音数が少ない。
- ② 発音はみな中国にあるものばかりで、身につけ易い。
- ③ 文法は疏闊【大まか、あらい】である。
- ④ 動物、器物類の名称と分類及び指事字は大抵中国と同じである。

⑤ 漢文(字)が10のうち、6～7を占めている<sup>#41</sup>。

それに、梁啓超はこの文章に「我が国の新学(新しい学問)を志している者はまた日本文を学ばなければならぬ」と、大声で疾呼して同志に訴えた。その理由は、要約して次のようである。

①日本は維新以来30年間に世界から広く知識をもとめ、訳書は数千種をくだらない。とくに政治学・資生学(経済学)・智学(哲学)・群学(社会学)に詳しい。これらは民智を開き、国の基礎をかためる急務であるが、我が中国では西学を修める者は少なく、それらの学問の訳書は皆無に等しい。私は祖国に献ずべく日々訳業に勤むも、直接読む人が増えるのを望む。

②日本の学は欧米より来たもので、最新で最精のものが入っているとは限らない。また重訳になれば真を失うことも多いが、年数のかかる英文を学ぶのと比べると、はるかに速い<sup>#42</sup>。

彼は明治維新以後の日本文化の進んでいることを認めながら、中国の変法や建設に備えるために、日本語を通じて洋書を広く翻訳して日本及び世界の優れた文化を学ぼうと唱えると同時に、日本の文字は中国の文字と共通するところが多いので身につけ易いから、日本語を介して洋書を翻訳したり紹介したりするのは、事は半分にして功は倍になるといったうえで、日本語の習得の易しさと有益さを強調した。

また、梁啓超は自ら『佳人之奇遇』や『十五小豪傑』等の政治小説を訳した。彼は福沢諭吉を中国に紹介した最初の中国人学者でもある。

当時、以上のような日本語観を持っている人は、大勢いたようだ。ここに代表として二人の論説を取り上げて考察してみよう。

一人は、梁啓超の恩師であり、戊戌変法の同志である、清朝末期の学者・政治家の康有為<sup>#43</sup>である。彼は1898年に『広訳日本書派游学摺(広く日本書を翻訳すること並びに遊学生を派遣することに関する意見書)』を奉った。彼はまず日本に敗れたのは、我が中国が鎖国して他国の新法・新学・新器を取り入れなかったからである、と断じて、西洋書の訳しにくいことを嘆き、次のように述べた。

私はいつもつくづく考えている。日本と我が国は同じ漢字を使っている。日本は明治維新から30年経ち日本はその間に欧米の政治・文学・武備・新思潮の良い本を全て日本語に翻訳した。……日本文は漢字が10のうち7、8をしめるので、日本の本を翻訳するには、あまり精力や時間をかからないと思う。従って京師【北京】に「訳書局」を設け、日本文に通じる人を選んで、主に翻訳の仕事を担当させるべきである。あらゆる分野の学問に及ぶが、先ず専ら優れた日本の政治書を選んで各分野に分類し翻訳させるほうが良い。もし、時間の余裕があれば、日本の優れた本を全て翻訳するべきである<sup>#44</sup>。

もう一人は、清朝の湖広総督の張之洞である。彼は1898年に『勸学篇』を書き、「広訳(広く訳す)」において、西洋人について西洋書を訳す場合、二つの弊害があるという。要約すれば次の通りである。

① 西洋の語、文に通ずる者が少ないので、誤訳が多い。

② 西洋人はことさらに緩やかに教えて、その時間を延ばすので、急場の間に合わない。

次に彼は日本語の用途を論じた。

日本は各種西学の主なものをみなすでに翻訳した。もし、日本を架け橋としてこの近道を選べば、西洋の本を習得する精力も省けるし、効果も速く取められる。即ち日本文の役割は大きい。

最後に、彼は西洋書から訳すのと、日本書から訳すのとを比較しながら、日本語を学び日本書を翻訳しようと強く主張した。

西文を学ぶには効が遅くなるが使い道は広いので、これはまだ何の仕事も任じない少年が採るべき道である。西書を訳すには功も容易で効も速やかなので、これは既に何かの仕事に任じた中年の人が採るべき道である。日本文を学ぶには、日本書を訳すのが、最も速い道である。それ故、西洋人のいうことに従うより寧ろ西洋文を学んだほうが良い、西洋書を訳すより寧ろ日本書を訳したほうが良い<sup>#45</sup>。

以上論述したとおり、康有為・梁啓超【改革派】と張之洞【保守派】とは、政治的意見は異なり、互いに攻撃しあったが、日本語を学び、日本書の翻訳を奨励する、という日本語観は全く同じである。また、中国民主革命の先駆者と呼ばれた孫文はその著書で何回も日本を中国との「同文」の隣国である、と指摘した。日本語について詳しく論じなかったのは残念だが、ここから当時の中国社会の日本語観が伺えるだろう。

因みにいうが、このような日本語観は一時的なものではなかった。しかし、時間のたつに伴って「同文」の日本語が悪用される不良現象がだんだん多くなった。30年余りたった1931年1月に、「若虚」というペンネームを使って、「評中国的訳著界（中国著訳界を評す）」と題して、『中国新書月報』第1巻第2号に投稿した一人がいた。彼は、次のようにいった。

東文一つまり日本文一は中国文と同文である。だから、名詞等はすぐ利用することができる。だから、日本文を翻訳するのは西洋文を翻訳するよりも易いようだ。しかも、中国人はもともと日本を軽視している。だから学術上でも日本を軽視している。そこで、一般の投機的な訳者は皆日本の図書から外国書の訳本を捜し出して、いい加減に訳してしまった。広告と表紙には西洋の原書からの訳だと、大法螺をふいている。ところで、日本訳も必ずしも悪くないし、西洋からの訳も必ずしもよくはない。間違ひさえなければ、日本訳だって構わないわけだ。……至るところ日本人の努力を盗み取っていながら、人の尻馬に乗って日本人の作品をけなしつけるとは実に変な話だ。新刊書を開いてみると、10のうち8～9は日本からきた代物だ。これは新文化における大変な汚点ではあるまいか？<sup>#46</sup>

ここで「新刊書を開いてみると、10のうち8～9は日本からきた代物だ」というのは、その内容についていっていると思われるが、彼の論述を通じて、日本語が清朝末期の中国社会にどんな大きな影響を与えたか、伺えるだろう。

最も大きく日本語の影響を受けたのはやはり梁啓超である。彼は「日本を学ぼう」と、強く唱えると同時に自ら実践した。彼はよく次のような注の形を採り、そのまま日本語語彙を中国に紹介した。

日本自維新三十年来。広求智識於寰宇。其所著有用之書。不下数千種。而尤詳於政治学。資生学。即理财学。日本謂之経済学。智学。日本謂之哲学。羣学。日本謂之社会学。等<sup>#47</sup>。

日本尋常師範学校之制。其所教者有十七事。…三、国語。謂日本文。…八、物理化学。兼声光熱力等<sup>#48</sup>。

他に「人格」、「世紀」、「理想」、「図書館」などはこの種の語彙であり、現代中国語にも採用されている。このような語彙は梁啓超の書いた文章のいたるところに存在するので、探し出して、研究を加えたりするのは簡単だが、本論文の課題にずれるので、ここでは諦める。

また、梁啓超の新文体形成の契機を日本在住中とするのが定説である。彼の文章は、日本語彙を取り入れただけでなく、日本文脈を取り入れた。彼の文章は筆端に熱を帯び、新鮮な感じを与える。それを「梁啓超式文体」または「新文体」と呼ばれる。彼自身も『清代學術概論』に、次のように述べた。

私はつとに桐城の古文を喜ばず、幼いときから漢魏晋文を学んだ。これ【『新民叢報』の発刊】に至り、自らを解き放ち、平易暢達な文を書くのを目指して、頑張り、時に俚語、韻語及び外国文法をもってし、まじりあいながら、文章を書いている。何も不自由を感じなかった。私について学ぶ人はお互いに競い合いながら、この文体を倣い、これは新文体と呼ばれる。老輩はこれを恨んで、「野狐」と誇ったけれども、その文は筋道が立っていて、つねに情感を帯びる<sup>#49</sup>。

大原信一は梁啓超の新文体について、次のように分析している。

- ① 彼は「時に韻語をもってし、まじりあい」というが、その「韻」とは押韻のことではなく「新文体中有節奏、重鋪排的部分」をさす。つまりリズムカルな表現、繰り返し表現をさす。
- ② 「外国文法をもってし、まじりあい」というのは、徳富蘇峰の文章の影響を受けたことをいう。徳富蘇峰（1863～1957）は西洋式表現で日本文を改造し、梁啓超は日本式表現で中国語を変革した<sup>#50</sup>。

確かに、梁啓超の文章を読んだ時には、日本語式な表現がよく感じられる。一つの例を挙げよう。

某頓首。上書於最敬最愛之中国将来主人翁留学生諸君閣下。某聞人各有天職。天職不尽。則人格消亡。今日所急欲提問於諸君者。則諸君天職何在之一問題是也<sup>51</sup>。

又、梁は「論中国人種之将来【中国人種の将来を論ずる】」という文章の前置きに次のように書いた。  
篇中倣効日本文体、故多委蛇沓複之病、読者幸諒之。

(日本訳：日本の文体に倣っていて、くねくね積み重なる嫌いがあるので読者にはお許しを乞う)  
いわゆる「日本の文体に倣ったので、くねくね積み重なる」とは、文の構成をさしていると思われる。

以上述べたように、梁啓超をはじめとする清朝末期の中国人は「日本語」を中国語と「同文」だと思って、日本語が他の外国語よりずっと学習し易いので、先ず日本語を習い、日本書を翻訳し、日本語を西洋文化を獲得する手段と、考えた。また、日本語を研究しているうちに、日本語の影響を大きく受けた。その影響は、また彼らを通じて、近代の中国社会、文化等に及んだ。

その影響を受けて、数えきれないほどの新語が日本から中国に輸入され、中国語の語彙の中に取り入れた。今も、現代中国語として多く使われている。「社会、政治、運動、取締、演説、主義、社会主義、資本主義、民主、憲法、民法、代理、法廷、哲学、鉛筆、参考書、意味、高潮……」はその例である。

ところで、梁啓超は日本語が中国語と「同文」なので、習得し易いと考えたが、これはあまり妥当ではないと思う。確かに中国語も日本語も漢字を使っているので、両国の初心者及びほんの少しでも中国語或いは日本語が理解できるよう、勉強する人にとって、ある程度の助けとなるが、外国語として身につけようとする人にとっては、この考えは大きな誤りだろう。さらに言えば、日本文の中になまじ漢字の混じっているのが中国人の透徹した日本語理解を妨げている、と私は思う。

そもそも、現代言語学では、日本語と中国語とは「同文」だといえないだろう。言語形態論から見れば、日本語は膠着語に属し、中国語は孤立語に属する。語順から見れば、日本語はSOV言語であり、中国語はSVO言語である。日本語と中国語は多くの漢字を共通に使うのは事実だが、そのため便利な面もあれば、間違いを起し易い面もある。特に、両国共有の漢語にも部分的類義語(例：交際、単位)・同形異義語(例：新聞、大丈夫)・逆順類義語(例：紹介、平和)等が多くあるので、両国の言語学習者にとって、もっと真剣に区別されなければならない。

## おわりに

ここに主に近代の中国人の見た日本語観を論説した。代表として選んだ人には言語学者もいるし、文学者も政治家もいる。近代中国人の日本語観の実態がある程度分かった。

以上述べたように、中日両国の二千年以上の文化交流の歴史の中で、清朝末期までは中国が優位だったが、清朝末期から中華人民共和国の成立するまでは日本に優位性があった。中国人の日本語観は、最初の少しの好奇心も寄せない状況から夢中に日本語を研究し、言文一致の日本語を高く評価し、さらに日本語に倣って中国語を改革しようと思うようになってきた。これは両国文化の交流実態を反映したものである。

また、以上述べたように、日本語は確かに近代の中国、特に近代中国文字改革運動に大きな影響を与えた。しかも、多くの日本語語彙が中国語に吸収され、今も現代中国語の語彙として使われている。

ところで、残念ながら本論文は近代中国人の見た日本語を主たる部分として論説したので、古代と現代の中国人の見た日本語について、あまり論じなかった。そして、その論説は主に仮名に絞られたので、両国とも使われている漢字にあまり触れなかった。これらを今後の課題として考察していきたいと思う。

注

- 1 清朝開明派重臣張之洞の『勸学篇』から引用したものである。但し、原文は見当たらなかったため、実藤恵秀の『日本文化の支那への影響』を参考にした。
- 2 同注 1
- 3 黄遵憲：(1848年～1905年)字は公度、清末の外交家・革新家であり、1877年から1882年まで初代駐日公使の随行員(参贊)として日本に滞在したことがあり、独創的な詩人である。『日本国志』『日本雑事詩』の著がある。
- 4 『日本雑事詩』(原本)：1879年に同文館聚珍版にて印行。154首を収録している。  
『日本雑事詩』(定本)：1898年に長沙にて刊行。200首を収録している。  
また、引用した雑事詩は、特別な注をつけない場合、『日本雑事詩』の原本にも定本にもあるものである。
- 5 『日本国志』：1887年の夏に脱稿し、1890年に出版した。40巻、国統、隣交、天文、地理、職官、食貨、兵、刑法、學術、礼俗、物産、工芸の12志からなる。この本は明治維新が成功した経験と教訓を教えるため、慎重な調査と考察に基づき、日本の歴史と現況をあらゆる面から捉え、明治維新を系統的に紹介した最初の中国書物である。
- 6 書き下し文は実藤恵秀・豊田稔訳『日本雑事詩』を参考にしたものである。
- 7 同注 6
- 8 同注 6
- 9 同注 6
- 10 同注 6
- 11 同注 6, 【 】内は筆者である。
- 12 同注 6
- 13 『日本雑事詩』(原文)から引用したもので、書き下し文は実藤恵秀・豊田稔訳『日本雑事詩』を参考にしたものである。
- 14 『日本雑事詩』(定本)から引用したもので、書き下し文は実藤恵秀・豊田稔訳『日本雑事詩』を参考にしたものである。
- 15 『日本雑事詩』(原文)から引用したもので、書き下し文は島田久美子の注した『黄遵憲』を参考にしたものである。
- 16 『日本国志』の第33巻の「學術篇」2を筆者が翻訳して引用したものである。
- 17 同注 16, 【 】内は筆者である。
- 18 同注 16
- 19 『清国人日本留学日記』から引用したものである。
- 20 『日本留学精神史』から引用したものである。
- 21 王 照：(1859—1933)河北寧河人、字は小航で、蘆中窮士と号し、また水東と号す。偽名は趙世銘である。革新を主張する清朝の役人である。19歳に秀才に当たり、33歳に挙人に当たり、36歳に進士に当たり、38歳に全国最初の地方小学校を創立した。1898年に戊戌政変が失敗した後、連座して日本に亡命した。主な著書には『官話合声字母』(1900)、『字母書』(1903)、『対兵説話』(1904)、『初学音官書』(1905)等がある。
- 22 『官話合声字母』から引用したものである。
- 23 この翻訳は、原文に基いて、倉石武四郎が『漢学会雑誌』に発表した「王照と勞乃宣」という論文を参考にしたものであり、筆者が手直した部分もある。【 】内は筆者である。
- 24 「王照と勞乃宣」という論文から引用したものである。
- 25 王照の『官話合声字母』から引用したものであり、訳文は筆者による。
- 26 同注 25, 【 】内は筆者である。
- 27 同注 25.
- 28 勞乃宣：(1843～1921)山東勞山人。南京の著名な音韻学者である。彼は王照の字母を手本にして、音母に六字、喉音に三字を加え、四声には入声を増して『増訂合声簡字譜』を作り、また七母三韻一濁音を増して『重訂合声簡字譜』を作った。主な著書には『増訂合声簡字譜』(1905)、『重訂合声簡字譜』(1905)、『簡字全譜』(1907)、『京音簡字述略』(1907)『簡字丛譜』(1907)等がある。
- 29 同注 23.
- 30 同注 25.
- 31 戴季陶：(1890～1949)名は伝賢、字は選堂、季陶。別名は戴天仇である。1905年から1908年まで日本に留学した。1913年から孫文の通訳兼秘書に任ぜられた。中華民国時代の政治家であり、中国国民党右派の理論的指導者である。  
日本に関する主な著書に『日本觀察』(1917)、『我的日本觀』(1919)、『日本論』(1927)等がある。
- 32 市川宏翻訳の『日本論』から引用したものである。但し、筆者が手直した部分もある。
- 33 同注 32.

- 34 同注 32.  
 35 同注 32.  
 36 同注 32.  
 37 梁啓超：(1873～1929) 字は卓如，号は任公。清朝末期，民国の初期の有名な学者・政治家，戊戌変法の重要な人物である。『清代學術概論』『飲氷室文集』など多くの著述を残した。  
 38 『飲氷室文集之四』に所集する「論学日本文之益」から引用したものであり，訳文は筆者による。  
 39 同注 38  
 40 同注 38  
 41 『飲氷室文集之一』に所集する「論訳書」から引用したものである。  
 42 同注 41  
 43 康有為：(1858～1927) 字は広夏，号は長素。清朝末期の有名な学者・政治家，戊戌変法の重要な人物である。  
 44 本文が見つからなかったため，実藤恵秀の『中国人の日本留学史』を参考にして，纏めたものである。  
 45 同注 44  
 46 同注 44  
 47 前述した梁の「我が国の新学を志している者はまた日本文を学ばなければならない」と，訴える理由の①の原文である。  
 48 『飲氷室文集之一』に所集する「論師範」から引用したものである。  
 49 『清代學術概論』から引用して，訳文は実藤恵秀の『中国人の日本留学史』を参考にしたものである。  
 50 大原信一の『近代中国のことばと文字』から引用したものである。  
 51 『飲氷室文集の十一』に所集する「敬告留学生諸君」から引用したものである。  
 ★「最敬最愛之中国将来主人翁留学生諸君（最も尊敬して愛する中国の将来の主人公になる留学生の諸君）」について：  
 修飾関係を表す場合，日本語では，助詞「の」・用言の連体形・連体詞の方法を用いられ，くねくね積み重なると感じられないが，中国語では助詞「の」に当る「結構助詞」の「的」しかないため，修飾文を重ねることはしない。  
 ★「諸君天職何在之一問題（諸君の天職はどこにあるか，という一問題）」について：  
 中国語では，「という一問題」の表現はない。

## 参 考 文 献

### I 著作部分：

#### (一) 中国人部分

- 1 『日本雑事詩』【原本】 黄遵憲 清朝光緒 5 年刊（活版）（1879 年）
- 2 『日本国志』（40 卷） 黄遵憲 清朝光緒 13 年刊（1887 年）
- 3 『日本雑事詩』【定本】 黄遵憲 清朝光緒 24 年刊（1898 年）
- 4 『盲人瞎馬之新名詞目錄』 彭文祖 秀光社 1915 年
- 5 『日本論』 戴季陶著 市川宏訳 社会思想社 1928 年
- 6 『飲氷室合集』（文集 45 卷・専集 104 卷） 梁啓超 上海中華書局 1936 年
- 7 『国語辞典』 教育部国語推行委員会中国大辞典編纂処 上海商務印書館 1937 年
- 8 『清代學術概論』 梁啓超 上海中華書局 1938 年
- 9 『清国人日本留学日記』（1905～1912） 黄尊三 東方書店 1939 年
- 10 『一九四九年中国文字改革論文集』 杜子勤編 大衆書店 1950 年
- 11 『中国文字与語言』（上，中，下） 黎錦熙選集 五十年代出版社 1953 年
- 12 『官話合声字母』 王照 文字改革出版社 1957 年
- 13 『文字』 梁東漢 新知識出版社 1958 年
- 14 『清末漢語拼音運動年表』 倪海曙 上海人民出版社 1959 年
- 15 『日本風土記（全浙兵制考）』 京都大学文学部国語国文学研究室編 1961 年
- 16 『漢字改革概論』 周有光 漢字改革出版社 1962 年
- 17 『五四以来漢語書面語言の変遷と発展』 北京師範学院中文系漢語教研組 商務印書館 1962 年
- 18 『孫中山全集』（第 2 卷） 中華書局 1982 年
- 19 『中日文化交流史論文集』 北京市中日文化交流史研究会 人民出版社 1982 年
- 20 『早期日本游记五種』 羅森等 湖南人民出版社 1983 年
- 21 『中日文化交流史論』 梁容若 商務印書館 1985 年

- 22 『中国人の日本研究史』 武安隆・熊達雲 六興出版 1989年
- 23 『日本留学精神史』(近代中国知識人の軌跡) 巖安生 岩波書店 1991年
- 24 『近代日中語彙交流史』(新漢語の生成と受容) 沈国威 笠間書院刊 1992年
- 25 『中国何以説不』 張学礼 華齡出版社 1996年
- 26 『近代中国官民の日本視察』 熊達雲 成文堂 1997年

(二) 日本人部分：

- 1 『中国人日本留学史稿』 実藤恵秀著 砂田実編 東京日華学会 1939年
- 2 『日本文化の支那への影響』 実藤恵秀 東京堂雪書院 1940年
- 3 『近代日支文化論』 実藤恵秀 東京大東出版社 1941年
- 4 『明治日支文化交渉』 実藤恵秀 東京光風館 1943年
- 5 『漢字の運命』 倉石武四郎 岩波書店 1952年
- 6 『漢字からローマ字へ』(中国の文字改革と日本) 倉石武四郎 弘文堂刊 1957年
- 7 『黄遵憲』 注者：島田久美子 岩波書店 1962年
- 8 『日本語の歴史 1 民族のこぼの誕生』一他篇 平凡社 1963年
- 9 『日本語の歴史 4 移りゆく古代語』一 他篇 平凡社 1964年
- 10 『日本雑事詩』 実藤恵秀・豊田稷訳 平凡社 1968年
- 11 『近代中国のこぼと文字』 大原信一 東方書店 1994年

II 論文部分：

(一) 中国人部分

- 1 「中国的日本研究」 姚維達 (『中日文化月刊』第二卷第六七期合期 1932年)
- 2 「漢字文化説」 何海鳴 (『中日文化月刊』第二卷第六七期合期 1932年)
- 3 「日本羅馬字問題」 張我軍 (『日文与日語』1934年7月号)
- 4 「關於日本語」 知堂 (『日文与日語』1935年1月号)
- 5 「現代漢語中从日語借来的詞彙」 王立達 (『中国語文』1958年2月号)

(二) 日本人部分

- 1 「王照と勞乃宣」 倉石武四郎 (『漢学会雑誌』第一二卷第一・二合併号 1944年12月)
- 2 「文字改革をかたる」 倉石武四郎 (『霞山倶楽部会誌』第二卷第五号 1958年5月)

この稿は吉見の指導，助言の下に李が本学に提出した修士論文を纏めたものである。

李 運博 (本学大学院修士課程)

吉見 孝夫 (本学教授・札幌校)